

FASEB Summer Research Conferences Retinoids に参加して
Columbia University
白上洋平

2010年6月、米国アリゾナ州 Carefree において FASEB Summer Research Conferences Retinoids が開催されました。私は現在米国に留学中であり、研究室のボスや同僚らと共にコロンビア大学からの参加となりました。私自身は初めてでしたが、日本からは過去に何度も来られている先生を含め数名の先生方が参加されておりました。先の参加報告にもありますように、カンファレンスの内容は多岐にわたるものでしたが、その中で「STRA6」と「膵インスリン分泌におけるレチノイン酸の作用」の発表が興味深いものでした。

STRA6 は RBP の特異的膜受容体として近年報告されたもので、レチノールを血中から細胞内へ取り込むメディエータとして注目されています。UCLA の研究グループは、STRA6 は胚発生時に発現し成体の臓器系にも広く発現しており、全く新しいタイプの機能を持つ膜輸送蛋白であること、その変異と疾患との関連性などについて発表していました。STRA6 の臓器による発現パターンの違いや、レセプター以外の機能を持つ可能性にも興味を持たれました。

また Napoli らは、9-cis-レチノイン酸が膵臓において Glut2 やグルコキナーゼの活性を低下させ、グルコース刺激性のインスリン分泌を抑制することを報告していました。これは最近大阪大学のグループより論文発表のあった、RXR がグルコース刺激性のインスリン分泌を抑制的に制御する、という内容と合致し、レチノイドと糖代謝の深い関わりを示すものと考えられました。

私の研究内容は、レチノイドの代謝経路をノックアウトしたマウスを数種用い、肝発癌との関わりを調べたもので、今回ポスターにて発表させていただきました。日本から来られた中込まどか先生（乙卯研究所）と永妻啓介先生（慈恵会医科大学）は、数あるポスター発表の中から口頭発表に選抜され、堂々とプレゼンテーションをされており非常に感銘を受けました。

レチノイドの研究を支え続けている先生方と、学ぼうとしている若手研究者らが世界中から集まるこのカンファレンスは、非常に刺激的で大変充実したものでありました。

余談であります。今回のカンファレンス期間中にワールドカップ南アフリカ大会や NBA ファイナルが開催されており、隙を見つけてはテレビ観戦している参加者の姿が（私を含めて）多く見受けられました。セッション終了後にはほぼ毎晩自主的な交流会が催され、スポーツ談義などに花が咲き、日中とは違った盛り上がりが見られました。

最後に、現地でご一緒していただき、このカンファレンスの歴史を含めたレチノイド研究に関する様々なことをご教授下さった高瀬幸子先生（浜松大学）、松浦知和先生（慈恵会医科大学）、中込先生、永妻先生にお礼を申し上げます。